

THANKS

(VOL. 209)

BUSINESS NEWS LETTER

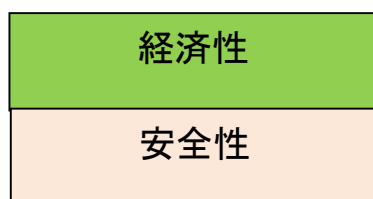
発行日：平成26年11月1日
発行者：有限会社サクスマインドコンサルティング
連絡先：〒359-0043
埼玉県所沢市弥生町1792-10
TEL:04-2907-1715
E-MAIL：info@thanksmind.co.jp
<http://www.thanksmind.co.jp>

特集

「経営分析の基本⑩」・・・安全性分析（その1）

本誌では、経営分析の基本（数字から会社の状況を把握しよう！）」というテーマを特集しています。前回までは、「経済性分析」についてケーススタディを行いました。今回は、「安全性分析」に入ります。

1. 経営の2大切り口 ～「安全性分析」の位置づけ



本誌202号で説明した通り、経営分析の一番大きな切り口は、「安全性」と「経済性」です。
安全性とは「倒産する心配は無いのか？」という視点。
会社には、「社会貢献」「社員の幸せ」「株主への還元」等、様々な目的があります。その目的を果たすための大前提は、倒産しないこと。
倒産してしまったら、元も子もありません。
それでは、企業の「安全性」をどのように評価したらいいのでしょうか？

2. 「安全性分析」の3つの視点



安全性分析には、以下の3つの視点があります。

①短期的支払い能力

短期（1年）の支払い能力は大丈夫か？

②長期的（潜在的）支払い能力

もう少し長い目を見た場合の支払い能力は大丈夫か？

③資金調達の健全性

資金調達のバランスは大丈夫か？

それでは、ひとつずつ見て行きましょう。
まずは、①短期的支払い能力の評価から。

3. 短期的支払能力の評価

(1) 流動比率

もし、皆さんが借金をしているとします。
今月中に返済すべき金額が30万円。
一方、今の持ち金は10万円で、更に今月中に入金できる見込み金額が15万円。
こんな状況になってしまったら、当然、家計は苦しいですね。
持っている財産を売却してお金を作るか、また、新たに借金をするか…。
やはり、「入ってくるお金が出て行くお金」よりも多くないと厳しいです。
会社も然り。
短期的な支払能力の評価も同じように行います。

資産	負債	
①流動資産 …「現金化の流れの中にある」 「1年以内に現金化される」	③流動負債 …「1年以内に返す必要あり」	他人の金 (借金)
②固定資産 …「現金化の流れの中にある」 (固定化)されている	④固定負債 …「1年以内に返す必要なし」	
		純資産
	⑤純資産 …「元手」+「儲け」	

$$\text{流動比率} = \frac{\text{①流動資産}}{\text{③流動負債}}$$

本誌（200号）で説明した、「貸借対照表5つの箱」の意味を思い出してください。

「流動資産」とは、ひとこと言えば、「今持っている現預金と、その仲間たち」。
つまり、「今持っている現預金と今後1年以内に現金に変わるであろう財産」が記載されます。
具体的には・・・

「売上債権（受取手形、売掛金）」「棚卸資産（製品、商品、仕掛品、原材料）」が代表的なものですが、それ以外にも、「貸付金（1年以内に返済してもらえる）」や、「上場会社等の有価証券」等もあります。

「流動負債」とは、これは1年以内に返済しなければならない借金。
具体的には・・・

「買掛債務（支払手形、買掛金）」「短期借入金（長期借入金の1年以内の返済分を含む）」や、物品を購入した場合の「未払金」、家賃や電気代等の「未払費用」、「税金の未払分」等があります。

「流動比率」は「**流動資産**」÷「**流動負債**」で計算します。

目安としては、以下の通りです。

理想値：200%以上 **良好水準：130%以上**

もし、100%を切ってしまうと、流動資産よりも流動負債の方が多いということですので、短期的な支払能力は厳しいです。

（2）当座比率

資 産		負 債	
① 流動資産	①A 当座資産 … 現預金、売上債権、その他	③ 流動負債 … 「1年以内に返す必要あり」	他人の金 (借金)
	①B 棚卸資産	④ 固定負債 … 「1年以内に返す必要なし」	
	② 固定資産 … 「現金化の流れの中にない (固定化)されている」	純資産	自分の金
		⑤ 純資産 … 「元手」+「儲け」	

$$\text{当座比率} = \frac{\text{①A当座資産}}{\text{③流動負債}}$$

前のページで流動資産の中の「現預金の仲間」について説明しました。

実はその中で、ひとつだけ、大きく性格が異なるものがあります。

それは、「棚卸資産」。

何が違うかという、他の流動資産は、いつでも現金化しようと思えばできるものか、もしくは、時期が来れば、ほぼ間違いなく現金化するものです。

もちろん、売上債権や貸付金は、相手が倒産してしまったら現金化できませんが、そのリスクは非常に小さいでしょう。

棚卸資産は、確かに「1年以内に現金に変わるであろう財産」ですが、それは、「販売された場合」というのが大前提です。

売れ残ってしまったら現金にはなりません。

あくまでも、「希望的観測」なのです。

このような棚卸資産の「不確実性」から、流動資産をさらに以下の2つに分ける考え方が成り立ちます。

●棚卸資産

●当座資産（流動資産の中で、棚卸資産を除いたもの）

（参考）当座を辞書で引くと「さしあたり」とか、「当分」と書いてあります。

「当座比率」は「当座資産」÷「流動負債」で計算します。

目安としては、以下の通りです。

理想値：100%以上 **良好水準：80%以上**

この比率が100%以上であれば、もし万一、商品が全く販売できなくても、支払はなんとかなるでしょう。

これが理想ですが、一般的には80%程度あればOKです。

参考：「株式会社モリモト」の事例・・・なぜ「当座比率」が重要なのか？

区分	モリモト	
	(平成18年4月1日～平成19年3月31日)	(平成19年4月1日～平成20年3月31日)
売上高	93,438	115,058
売上原価	72,410	88,722
売上総利益	21,028	26,336
販売費及び一般管理費		
入件費	1,820	2,015
広告宣伝費	2,062	1,897
減価償却費	110	106
その他	3,977	4,137
合計	7,769	8,155
営業利益	13,259	18,181
営業外収益	722	4,304
営業外費用	3,135	4,269
経常利益	10,846	18,218

区分	モリモト	
	(平成19年3月31日)	(平成20年3月31日)
流動資産		
現金及び貯金	14,338	17,595
売上債権(受取手形・売掛金)	-	139
棚卸資産	161,440	190,799
その他流動資産	7,546	4,505
合計	183,324	213,038
固定資産		
有形固定資産	4,251	4,450
無形固定資産	73	380
投資・その他資産	7,765	7,281
合計	12,089	12,111
資産合計	195,413	225,149
流動負債		
買掛債務(支払手形・買掛金)	20,448	20,350
短期借入金+1年以内に返済する長期借入金	53,575	71,981
その他	10,073	13,594
合計	84,096	106,925
固定負債		
社債	382	128
長期借入金	84,549	73,471
その他	1,176	1,838
合計	86,107	75,435
負債合計	170,203	181,360
資本金	890	5,771
その他(利益剰余金等)	24,320	38,018
純資産合計	25,210	43,789
負債純資産合計	195,413	225,149

分析			モリモト	
			平成19年3月期	平成20年3月期
経済性 収益性	総資本経常利益率	%	5.6%	8.1%
	売上高経常利益率	%	11.6%	15.8%
	売上原価率	%	77.5%	77.1%
	売上総利益率	%	22.5%	22.9%
	営業利益率	%	14.2%	15.8%
	売上高販売管理費率	%	8.3%	7.1%
	売上高人件費率	%	1.7%	1.8%
	売上高告費	%	2.2%	1.6%
	営業外収益率	%	0.8%	3.7%
	営業外費用率	%	3.4%	3.7%
効率性	総資本回転率	回	0.48	0.51
	流動資産回転率	回	0.51	0.54
	売上債権回転率	回	-	827.8
	売上債権回転期間	日	-	0.4
	棚卸資産回転率	回	0.58	0.60
	棚卸資産回転期間	日	622.0	597.0
	固定資産回転率	回	7.73	9.50
成長性	対前年度売上高成長率	%		123.1%
	対前年度売上総利益成長率	%		125.2%
安全性	流動比率	回	218.0%	201.1%
	当座比率	回	26.0%	21.0%
	固定比率	回	48.0%	27.7%
	固定長期適合比率	日	10.9%	10.2%
	自己資本比率	回	12.9%	19.4%

株式会社モリモトはマンションの分譲販売会社。
急成長を遂げていましたが、平成20年11月に倒産してしまいました。
(注：民事再生法により現在も企業としては存続しています)

前のページは、倒産した年と、その前の年の決算書。
そして、上記は、経営分析の指標です。
まず、注目すべきは経済性の高さ。
「総資本経常利益率」は、以前、本誌でケースで挙げた「マンダム」に匹敵します。
また、短期的な安全性を評価する「流動比率」も理想値の200%を超えています。
それなのに、なぜ、倒産してしまったのか？

「当座比率」をご覧ください。
たったの21%!!!
なぜ、「流動比率」と「当座比率」にこんなに差があるのでしょうか？
その答えは、貸借対照表の「棚卸資産」。
内容としては、マンション建築のために仕入れた土地や、建築中または完成後のマンションですが、その棚卸資産回転期間は597日です。
つまり、2年近くの在庫があるということ。
さすがにこれでは、お金が足りなくなってしまう。
それにしても、なぜ、これほどまでに在庫が溜まってしまったのか？
もちろん、景況悪化による販売不振もありますが、もっと大きな理由は、あの「構造計算書偽装問題」。
その結果、2007年に建築基準法が改正され、建築審査が厳しくなってしまって、土地を仕入れたけれども建てられない・・・・
建てたけれども販売できない・・・・
業界としては散々で、モリモト以外にも多くのマンションの分譲販売会社が倒産しました。
姉齒さんのおかげで、何万人に人が路頭に迷ったか・・・・
本当に大変なことをしてしまったのです。

<次回に続く>